北陸石仏の会々報

第61号

令和2年9月1日発行

編集と発行

北陸石仏の会

（日本石仏協会北陸支部）

代表　平井一雄

〒939-1315

富山県砺波市太田

1770　尾田武雄方

電話 0763-32-2772

振替 00740-2-11974

（年会費 3000 円）

・道しるべの阿弥陀如来
・自宅から近い石仏
・笠塔婆陽刻板碑
・二臂の千手観音墓標
・近くの寺院の石仏
・川除地蔵報告書

太田四つ角の道しるべの阿弥陀如来さま

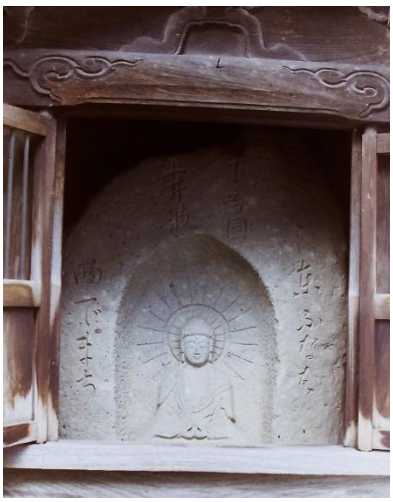
尾田　武雄

富山県砺波市太田の中心部に通称「太田の四つ角」がある。南北に現在の庄川と旧庄川の流路であった千保川の中にある旧道が中筋往来である。これは商都高岡と井波別院瑞泉寺（真宗大谷派）井波町を結ぶ重要な旧道であった。また東西は砺波市の中心である出町と富山市を結ぶ路線でこれも貴重な道である。この路線は旧国道三八九号でもあり、現在は金沢市と富山市を結ぶ最短距離の重要な道路でもある。この両旧道に交わるところがこの四つ角である。

その角に小堂があり、中央に浮彫の阿弥陀如来坐像が鎮座している。砺波地方は真宗王国であるが、この太田地区は高野山真言宗千光寺の檀家の多いところである。しかし真宗門徒は四分の三以上の割合であろう。お堂にはほかにやはり浮彫の阿弥陀如来立像もある。高知市の日本石仏協会理事岡村庄造氏がこの石仏の拓本採りに来られた。きれいな採拓で岡村氏の人柄が感じられる。ほか近くの石仏をご案内したが、砺波の石仏はやさしく、おだやかですねとは岡村氏の談話が心に残っている。

さてこの石仏の、銘文もしっかり読める「東ふなば　西でまち　下高岡　上井波」とある。交通の安全を願って造像されたのであろう。旧道を歩く人々の道しるべとして親しまれたのであろう。また「東ふなば」とあるのは、現庄川の太田橋付近にあった、渡し舟の舟場があったところを指している。何気なく長く安置されている石仏であるが、じっくり拝見することで実に雄弁に語りかけておられるような気がする。

拓本



阿弥陀如来坐像

拓本を採る岡村庄造氏

自宅からいちばん近い石仏

松井 兵英

富山県富山市八尾町大杉（杉原中学校東二百m、旧立山-山田線南）にあります。ブロック造の小堂に祀られ、私たちは「お地蔵さま」と呼んでいました。小学生のころ一～二度、お地蔵さま祭りに参加した記憶があります。堂の前にござを敷き、道を通る人たちにお供物や賽銭をお願いし、夕方には尼さんが読経され、お供物を分けて頂いて帰りました。八尾町教育委員会『石仏を訪ねて』（平成二年）には「地蔵菩薩、高さ三十四㎝、幅二十五㎝、創建明治二十年頃、管理者名と由来・道を守ってくださる」とあり、また『富山市ふるさと歴史map』富山市教育委員会には「如来坐像」とあります。たしかにこの道は婦中町道島や八尾から成子の渡しで神通川を渡り、大久保町、上滝までを東西に結ぶ道路です。先日、平井一雄氏と尾田武雄氏に見て頂く機会があり、改めて拝観しました。なんと螺髪。両先生の所見では、「釈迦如来か薬師如来のようだが」とのことでした。右手は補修され指の形はわかりません。銅の薬壺があったのかもしれません。近年は祭りも行われず、顧みる人も少ないようですが、わが村の東の入口で道路を行く人々を見守り、また疫病の侵入を防いでくださっているのだと思い、改めて感謝しました。

まったく別のお話しです。コロナ渦が叫ばれてから、私はひとりで近所の「西国三十三所観音写し」を巡っています。旧・大沢野町寺家公園の写し観音霊場は有名です。元富山市埋文センター所長の古川知明先生がネットの「富山石文化研究所」で「石仏による小規模写し霊場」として十カ所を紹介されています。その中では、旧・大山町日尾の「万泉寺跡の観音様」の表情が美しく、私はいちばん好きです。古川先生は作者として中川甚右衛門を推定されています。『とやま民俗・日尾民俗誌』（富山民俗の会 二〇〇二年）で平井一雄氏、尾田武雄氏もこの石仏の調査考察を報告されています。

富山市八尾町大杉の石仏
釈迦如来 or 薬師如来？

お堂の場所（左）
背景は杉原中学校と牛岳
道路は旧県道立山山田線
東から写す

日蓮宗寺院の笠塔婆陽刻板碑

滝本 やすし

石川県の能登地区はほぼ全域が真言宗であったが、ちょうど板碑の造立が盛んであった時期に浄土真宗や日蓮宗などに改宗された寺院が多い。能登地区には数多くの板碑がみられるが、笠塔婆を陽刻した板碑は少なく、羽咋市周辺の日蓮宗寺院にいくつかみられる程度である。

妙成寺の板碑

羽咋市滝谷町の日蓮宗本山金榮山妙成寺は、永仁二年(一二九四)に日像によって創建されたと伝えられる。能登随一の大伽藍であり、十棟が国の重要文化財に指定されている。開山堂内には日像の供養塔である笠塔婆を中心に歴代の笠塔婆が並んでおり、開山堂右手の覆い堂にも多くの笠塔婆が並べられている。浄行堂、開山堂右手の覆い堂などに板碑がみられる。浄行堂内の板碑のいくつかは、以前は浄行堂周辺に点在していた。また開山堂右手の覆い堂内の板碑は、主に墓地内に点在していたものと思われる。

浄行堂内には、浄行菩薩の左奥に三基、右奥に二基の板碑が納められている。左から順に見てみよう。

①上部に一条線を刻み、「妙法蓮華経」を陰刻する。高さ約38 cm。

②笠塔婆陽刻一基を陽刻しているが、塔身に文字が刻まれていたのか不明である。高さ約45 cm。

③方錐型で、金剛界大日種子「バン」を薬研彫りしている。

④剥落が激しく、信仰標識が不明である。

⑤方錐型で、金剛界大日種子「バン」を薬研彫りしている。

開山堂右手の覆い堂には、左手前に四基、右手前には三基の板碑が納められている。左から順に見てみよう。

⑥上部に一条線を刻み、笠塔一基を陽刻し、塔身に「南無妙法蓮華経」の題目を陰刻している。下部が欠損している。高さ約42 cm。

⑦上部に一条線を刻み、笠塔一基を陽刻し、塔身に「南無妙法蓮華経」の題目を陰刻している。高さ約48 cm。

⑧上部に二条線を刻み、五輪塔一基を陽刻している。水輪部に金剛界大日如来種子の「バン」を薬研彫りしているようにも見えるが、はっきりとしない。

⑨上部に一条線を刻み、笠塔婆二基を並列して陽刻ししている。各々の塔身に「南無妙法蓮華経」の題目を陰刻しているようだがはっきりとしない。高さ約40 cm。

⑩笠塔婆一基を陽刻し、塔身に「南無妙法蓮華経」の題目を陰刻している。高さ約36 cm。

⑪上部に一条線を刻み、笠塔一基を陽刻し、塔身に「南無妙法蓮華経」の題目を陰刻し、その下に蓮座を陰刻している。高さ約56 cm。

⑫五輪塔一基を陽刻しているが、下半分(水輪と地輪)が大きく欠損している。

墓地内にも板碑がみられるが、残欠であり信仰標識などを確認できない。

二基の方錐型板碑と五輪塔陽刻板碑は、妙成寺創建以前に造立されたもので、後に寺域へ持ち込まれたものであろう。

本成寺の板碑

羽咋市柴垣町の日蓮宗長興山本成寺は、応永三年(一三九六)に日立(妙成寺五世)によって創建されたと伝えられる。明治二十九年に、柴垣の集落内から現在地へ移された。開山堂内に、日立の供養塔である笠塔婆が納められている。開山堂内に二基、開山堂左手の小堂内にも二基の板碑がみられる。

①五輪塔一基を陽刻しているが、水輪部に金剛界大日如来種子の「バン」を薬研彫りしているのかはっきりとしない。

②五輪塔一基を陽刻しているが、水輪部に金剛界大日如来種子の「バン」を薬研彫りしているのかはっきりとしない。

③上部に一条線を刻み、笠塔一基を陽刻している。塔身に「南無妙法蓮華経」の題目を陰刻しているのかはっきりとしない。高さ約30 cm。

④五輪塔一基を陽刻しているが、水輪部に金剛界大日如来種子の「バン」を薬研彫りしているのかはっきりとしない。

妙法輪寺の板碑

宝達志水町麦生の日蓮宗寶榮山妙法輪寺は、もとは法輪寺という真言宗寺院であったが、七百余年前に日像と日源によって日蓮宗に改宗され妙法輪寺と改められた。境内の大きなナンテンが県の天然記念物に指定されている。梵鐘は第三代宮崎寒雉作で、享保十九年(一七三四)の銘がみられる。

本堂裏手の位牌堂内に五基の板碑が納められており、墓地内の無縁墓には三基の板碑が立てかけられている。位牌堂内の五基は二段の檀上に置かれている。ここでは手前左を①、手前右を②、奥の三基を左から順に③④⑤としておきたい。また墓地内の三基は、左から⑥⑦⑧としておこう。

①五輪塔一基を陽刻し、水輪部に金剛界大日如来種子の「バン」を薬研彫りしている。改宗以前の真言宗時代の作である。高さ約60 cm。

②上部に一条線を刻み、笠塔婆二基を並列して陽刻し、各々の塔身に「南無妙法蓮華経」の題目を陰刻している。高さ約40 cm。

③上部に一条線を刻み、笠塔一基を陽刻しているが、塔身に文字が刻まれていたのかわからない。下部が欠損している。高さ高さ約27 cm。

④上部に一条線を刻み、笠塔婆二基を並列して陽刻し、各々の塔身に「南無妙法蓮華経」の題目を陰刻している。笠塔婆右手の碑面に文字が刻まれているようだが判読できない。高さ約40 cm。

⑤上部に一条線を刻み、笠塔一基を陽刻し、塔身に「南無妙法蓮華経」の題目を陰刻している。笠塔婆右手の碑面に「妙日」と刻まれている。高さ約48 cm。

⑥上部に一条線を刻み、笠塔婆二基を並列して陽刻し、各々の塔身に「南無妙法蓮華経」の題目を陰刻している。下部が破損している。高さ約40 cm。

⑦笠塔一基を陽刻し、塔身に「南無妙法蓮華経」の題目を陰刻している。笠塔婆右手の碑面が左側よりも広いことから文字が刻まれていたのではないかと考えられるが、痕跡を確認できない。高さ約45 cm。

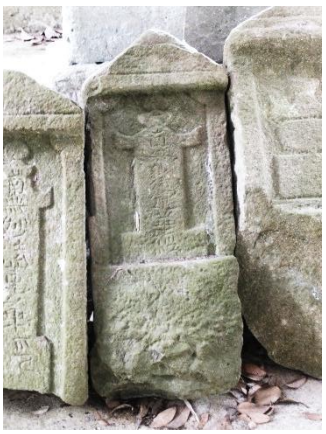
⑧上部に二条線を刻み、笠塔婆二基を並列して陽刻し、各々の塔身に「南無妙法蓮華経」の題目を陰刻している。高さ約43 cm。

妙法輪寺には八基の板碑がみられるが、五輪塔を陽刻した一基は真言宗時代のものであり、他の七基は笠塔婆を陽刻しており、ちょうど板碑造立が盛んであった時期に改宗されたことがわかる。

羽咋市と羽咋郡宝達志水町の日蓮宗の古寺を訪ねた。三ヶ寺に、あわせて二十四基の板碑を確認し、そのうちの半数以上の十四基が笠塔婆陽刻板碑であった。金沢市にも同時期に創建あるいは改宗された日蓮宗寺院がいくつかあるが、笠塔婆陽刻板碑は確認できない。加賀地方は板碑がほとんど造立されない地域であり、他宗派の板碑も金沢市周辺ではほとんどみられない。

妙成寺②

妙成寺⑥


妙成寺⑦

妙成寺⑨

妙成寺⑩

妙成寺⑪

妙法輪寺④

妙法輪寺③

妙法輪寺②

本成寺③

妙法輪寺⑧

妙法輪寺⑦

妙法輪寺⑥

妙法輪寺⑤

本成寺開山堂の笠塔婆

妙成寺開山堂の笠塔婆

近くの墓地にある二臂の千手観音墓標

平井　一雄

旧市町村には大字単位で共同墓地があり、かっては火葬場も併設されていたところが多い。近代の墓石以外に地蔵、観音などに戒名・法名・命日などを刻した個人墓標も多くある。

富山県旧大沢野町の長附地区共同墓地、南部上大久保地区、坂本二区の共同墓地を散策していると、未開敷蓮華を持つ聖観音や蓮台持観音の墓標も多くある中で、冠を冠っているが蓮台などの持物もなく、冠合掌の勢至菩薩ではない観音墓標を数体見つけた。手印は右手左手の手のひらを上下に重ねる梵篋印といわれる善光寺如来の脇侍仏の手印である。

『諸宗仏像圖彙』にこの石像にそっくりな図像があった。図像は三室戸寺の千手観音であり、梵篋印の手印である。墓標の石像も梵篋印のようである。

三室戸寺の資料を調べた。

『西国巡礼三十三所観音めぐり』（佐和隆研一九七〇年三月）によると西国三十三所観音第十番三室戸寺の本尊千手観音は秘仏であり、ここに掲げた写真は前立仏である。

これは本尊の摸刻で飛鳥時代の形式を備えた木彫観音像である。

この寺には平安時代の仏像が数体も遺されているので、この秘仏本尊も前立仏から推測すると飛鳥時代にさかのぼるものかと思われるのである。云々

二臂の梵篋印で千手観音のいわれはわからなかった。

報告する観音墓標は大正・昭和の作であり江戸に遡るものはない。

注

・手印は 印、 印相ともいう。

仏教において、手の指で様々な形を作り、仏・菩薩・諸尊の内証を標示するもの。

行者が本尊と融合するために、その本尊の印相を結ぶこともある。もともとは、印相に関する定まった儀軌は無かったが、密教の発達に伴って印相が定まり、意味が説かれるようになった。儀軌の成立した時代の違いや地方の別によって、印相には差異がある。

・梵篋印

一切随心真言印ともいう。

入唐八家の一人で平安時代の僧・宗叡が、唐国で伝授された大隧求菩薩の八印の八番目が「一切随心真言印」である。

・印の結び方

仰向けにした左掌を胸にあて、うつ伏せにした右の掌をその上に合わせる。

・梵篋印の由来

大隧求菩薩の持物である「梵篋」は経文を記した貝多羅葉（バイタラヨウターラ樹の葉）を重ね、その上下を板で挟む形式の経本で、今もチベットや東南アジアなどの仏教で用いられている。この印はその形状を表している。大隧求菩薩には滅罪の霊験があり、とくに横死者の供養でこの菩薩の印を結び、真言を唱えると必ず成仏するとされた。

『明治増補佛像圖彙五』より

第十番三室戸寺　千手観音前立
『西国樹雲霊三十三所観音めぐり』より

旧大沢野町長附共同墓地　墓標1
大正十四年十一月十四日
法名　釋尼妙■

旧大沢野町長附共同墓地　墓標2
大正十一年八月■■
若■釋■■

旧大沢野町坂本２区古墓標群
大正七年■■
新皈眞彭倫■寿信女

旧大沢野町上大久保共同墓地　墓標
昭和四十二年建立
山■静治　コト

自宅近くの寺院の石仏

石川県金沢市横川四丁目の曹洞宗慈眼庵境内の観音と地蔵です。

池田　紀子

横川子安地蔵尊（令和元年九月）
昔、疫病が流行って子供や村人が亡くなったことにより、供養と安全を願って祀られたと言われています。

美しい観音様です。幕末頃の金沢石工の作と思われます。

川除地蔵（阿弥陀如来）報告書

尾田　武雄

所在地　富山県砺波市上中野

法量　高さ92㎝　幅45㎝　厚さ35㎝
像高36㎝　幅30㎝

銘文　台座に雄渾な薬研彫りで「御川除」とある。

石材　自然石
グリーンタフ・緑色凝灰岩（砺波地方では俗に金屋石といわれる）。

造像年　おおよそ江戸時代中期ごろに作成されたと思われる。

作者　その作風や彫法から、一生の間一千体を彫ったとされる森川栄次郎作とは明らかに違う。庄川町金屋に住した石工の作ではなく、井波石工の手にかかるものかもしれない。

管理者　昭和五十八年頃に中野地区の婦人ボランティアによる石仏調査によると、その時点では不明とされている。集落の管理下にあるものと思われる。

所見　良質の緑色凝灰岩(金屋石)の自然石を使用し、中を約14㎝深く皿状にくぼめた状態にしている。尊像を浮彫りにするこの地方特有の様式であり、外側がお堂のような役割を感じさせる。如来の特徴である肉髻は確かにあり、螺髪は風化で薄れてはいるが認められる。お顔は丸みがあり上品で耳は大きい、目は半眼で、鼻は長い年月のためかやや削れた感じを受ける。口元はやや笑みをたくわえ、衣文はさらりとし三道も見受けられ、全体から受ける雰囲気は小さい石仏であるが大きく見える。台座の蓮弁はシンプルで、そこに坐す像は風格のある姿である。結跏趺坐し、両手を上向けにしてそれぞれの親指と、人さし指を捻じて臍下で組み合わせる弥陀定印のスタイルである。像容からでは明らかに阿弥陀如来像である。しかし地元では川除地蔵を呼ばれ信仰されている。地元にとっては崇敬する石仏であるので、地元で伝えられる呼称を尊重すべきであろう。

会からのお知らせ

新型コロナウィルスの感染拡大が止まりません。
残念ですが、十月に開催を予定していた例会を中止します。
春も開催できなかったので、来年に持ち越しとなります。
路傍の石仏を探訪するだけならば感染の危険はありません。普段何気なく見過ごしている近所の石仏を、もう一度ゆっくりと見直してみるのも良いでしょう。